

「台湾民主国」とは何だったのか



理事・拓殖大学政経学部教授 丹羽文生

1895年4月、日清戦争に勝利した日本は、日清講和条約(下関条約)により、清朝政府から台湾の割譲を受けた。だが、これに台湾住民たちが猛反発、5月23日、「台湾民主国」として独立を宣言していたことは意外に知られていない。今から130年前のことである。

1885年10月、台湾は清国の一行政区として「福建台湾省」となり、日本に割譲される際は、唐景崧が「台湾巡撫」という代表ポストに就いていた。だが、当時の台湾は、土匪と呼ばれるゲリラが暗躍、治安は乱れ、人々の間には阿片吸引の悪習が蔓延、コレラ、マラリア、ペストといった疫病が猛威を振るい、故に清朝政府も「化外の地」と見做し、自らの版図として扱っていなかった。

日本の進駐は、台湾住民にとっては寝耳に水だった。日本への接収を防ぐため、彼らは急遽、唐景崧を総統に担ぎ台湾民主国を成立させた。

これに対し日本は、大量兵力を投入した。海軍大将の樺山資紀を初代台湾総督に任命、樺山一行は途中合流した北白川宮能久親王率いる「近衛師団」と一緒に台湾上陸を果たし、6月7日に台北に無血入城、17日には始政式を挙行、台湾統治をスタートさせた。

台湾民主国は日本に徹底抗戦した。この間、「民主国之寶印」と刻んだ国璽を作り、オリジナルの紙幣や郵便切手も発行した。台北中心部にある国立

台湾博物館には、藍色をバックに黄色の虎を描いた台湾民主国の国旗「藍地黄虎旗」が保管され、展示スペースには、その複製版が掲げられている。

だが、近代兵器を持つ日本軍勢の進撃に恐れをなしたのか、唐景崧は公金をポケットに入れ老婆に変装して厦門に逃亡、その後継として第二代総統となった劉永福も難民になりすまし同じく厦門へ脱出を図った。結果、台湾民主国は僅か5ヵ月足らずで滅亡した。

第二次世界大戦後の蒋介石、蔣経国による「両蔣時代」は、「台湾独立」を促すとして台湾民主国の存在は語ることすらタブーだった。だが、李登輝政権による自由化、民主化後は、台湾民主国の研究が進み、今日では「藍地黄虎旗」をプリントしたTシャツやトートバッグ、ハンドタオル、さらにはマグカップやキーホルダーが台湾土産の定番として販売されている。

19世紀末の台湾において、人々の間に同胞意識が芽生え、「民主国」として「独立」という発想が出てきたこと自体、極めて画期的であった。近年、台湾では「台湾人」としてのアイデンティティが高まりつつある。生まれながらにして独立志向の強い「天然独」と呼ばれる若い人たちも増えている。こうした現象を、彗星の如く現れ消えていった台湾民主国が現代に蘇りつつあると捉えるのは些か極端過ぎるだろうか。